声 VOICE

観光を支える方々の声を寄稿、インタビューを基にお届けします

※五十音順で掲載しています

「かくれんぼ」が両者をつなぐ

地域の魅力伝える「本気の遊び」時間

一般社団法人日本かくれんぼ協会
代表理事　高山 勝氏

地域の魅力を伝えるためには、訪れた人がその場所と人と濃く関わる時間が大切です。私は濃く関わるための方法の一つが「本気で遊ぶ」体験だと考えており、「日本かくれんぼ協会」として自治体や地元企業と連携し、大人も子どもも楽しめる「かくれんぼイベント」を企画しています。

「かくれんぼ」と聞くと子どもの遊びを思い浮かべる方が多いでしょう。しかし、参加すると大人の方が次第に本気になり、隠れ場所を探すだけでも周囲を見る目が変わります。木の陰や地形の起伏を確かめ、相手の動きを読み、仲間と作戦を練る。その土地の環境と地域の人の人柄が遊びの面白さを左右します。ルールがシンプルであるからこそ、子どもから大人、地域国籍性別関係なく、初対面の人同士でも一緒に遊べます。共通の敵である鬼から身を潜め、作戦を共有し、アドバイスし合ううちに、会話が進み地域の方と訪れた方みんなが「遊び仲間」となります。

和歌山県すさみ町では、町と連携し海水浴場や廃校を舞台にしたかくれんぼイベントを7回企画してきました。観光資源として親しまれる海辺も、遊びの舞台として捉えれば、体の動かし方や楽しみ方が変わります。もう使われていない学校も、地元の人の思い出話があれば、初来訪者にとってもストーリーが生まれます。地域にある場所の遊び方を変えることで訪れる理由をつくることができます。

かくれんぼイベントは、訪れた人の発信内容を想像して企画します。「参加した」「訪れた」という事実ではなく、「鬼に緊張した」「バレずに楽しかった」という気持ちを発信いただけるような演出を心がけています。発信を受け取った人が、その地域で得られる感情をイメージし、それをめがけて訪れるようになることも目指しています。

企画にあたっては、地域の方にも遊びのつくり手として関わっていただきたいと考えています。地元ならではの隠れ場所や普段は気づかない場所の魅力を教えていただくことで、その地域だけの体験が生まれます。訪れた人の新鮮な驚きが、住む人にとっても地域の良さを再発見し、誇りを感じる機会になることを目指しています。

旅先で一緒に遊んだ人や夢中になった時間は、その地域を思い出すきっかけになります。「あの人にまた会いたい」「次は家族と参加したい」。そんな気持ちにつながる体験を地域の皆さまと考えていきたい。かくれんぼを通じて、訪れる人と迎える人が一緒に楽しめる観光の可能性を広げていきます。

観光の現場を支える外国人材

インバウンド対応は内なる国際化から

株式会社シンシアインターナショナル　代表取締役
行政書士　中小企業診断士　鶴野 祐二氏

2025年の訪日客数は過去最高の約4268万人に達し、初めて4千万人を突破した。オーバーツーリズムの懸念はあるものの、インバウンド需要は宿泊業界にとって依然として重要な成長の生命線だ。現場を支える外国人材も年々増加しており、恩恵を受ける企業ほどその採用に前向きに取り組んでいる。

一方で、日本人に比べ転職への抵抗感が少ないのも事実である。生涯同じ会社に勤める意識は薄く、仕事を覚えた頃に離職されたり、社内コミュニケーションの壁から外国人採用自体を見直そうとする現場の悩みも耳にする。

日頃から多くのホテルや旅館の皆さまと向き合い、人材紹介や在留資格手続き、現場での定着を支援する中で、外国人材と良好な信頼関係を築き、成果を上げている施設には共通する姿勢があると感じる。そうした取引先の皆さまの実践から学んだ、受け入れを成功へ導く「三つのポイント」を共有したい。

一つ目は、「在留資格の適切な理解と最新動向の把握」だ。特定技能の創設で受け入れの裾野は広がったが、フロント等を担う「技術・人文知識・国際業務」の在留資格は審査が厳格化している。また、宿泊現場で調理等のニーズが高い特定技能「外食業」は上限の5万人に達し一時受け入れ停止となるなど、動向への注視が欠かせない。その他、留学生の資格外活動やインターンシップの受け入れなど選択肢が多いからこそ、法令順守の徹底が外国人の安心につながる。

二つ目は、「多様性を尊重し、強みに目を向ける姿勢」である。文化が異なる地から来た彼らが日本の仕事文化になじむには時間を要する。しかし、定着に成功している施設では、文化の違いを受け止め、真面目で貢献意欲の高い彼らの熱意に着目し、現場の上司が先入観を持たずに温かい対話を重ねている。

三つ目は、「企業理念やルールの明確な言語化」だ。社是やクレド、やってほしいことや避けるべきこと、求める自発性をクリアに伝えることである。目指す方向が明確になれば、外国人材は迷いなく、力を発揮でき、職務上のストレス軽減や働きやすさに直結する。

インバウンド対応とは、単なる多言語化ではなく、組織そのものを磨き上げる「内なる国際化」にほかならない。労使でWIN－WINの関係を築き、政府が目指す秩序ある共生社会の実現に向けて最前線を走る宿泊業の皆さまの挑戦を、専門家としてこれからも全力で応援していきたい。

城崎温泉で国産食材と地域の魅力を体感

食が地域の魅力をつなぎ、それを広げる観光業に

株式会社農協観光
地域共創事業部地域共創推進課
徳田 勇人氏

日本旅行業協会（JATA）主催の「ツアーグランプリ2026」国内旅行部門で、当社の『国消国産応援企画　まるごと但馬in城崎温泉』が観光庁長官賞を受賞しました。企画のポイントは二つです。国産食材の魅力を伝えること、地域の魅力を伝えることです。

当社は食に近い会社で、地元のおいしい食材に出会う機会がたくさんあります。その生産や漁業に携わっている方々の思いや苦労を聞く機会も多くあります。それを伝えたいという思いがずっとあり、疲弊する地域に少しでも貢献したいという気持ちと重なり合った企画です。

「地域貢献は経済効果を生む」という持論がありますので、少しでもお金を地方に落としたいと考えています。経済効果（お金を落とす）には、旅中（旅行中の買い物や旅後（帰宅後の通販購入がありますが、本企画では旅前（旅行先の決定）からそこを意識しています。

夕食のほとんどが地元食材なので、宿泊代金も安価ではありません。また、地域の方々との交流では謝金や会場費も支払いますので、旅行代金が少し高くなります。それを承知して参加いただくので、旅前からその地域に対しての思いや理解を持ち、当日の購買意欲を高める準備となります。この旅前の周知は当社の営業の尽力が欠かせません。企画だけでなく、販売する思いが必要となっています。

日本の各地域に住んでいる多くの方は「自分の地域には魅力なんて無い」「観光で外貨なんて稼げない」と思っています。しかし、人が住む限り何かしらの魅力があり、それを引き出せればよいと考えています。今回の但馬地域は、全国的な知名度はあまり高くないかもしれませんが、コウノトリが育むお米や香住ガニ、但馬牛、日本酒など、ポテンシャルの高い素材がたくさんあり、造成はしやすかったです。一つの市町では少なくても、地域を広げると魅力やストーリーをつなげることができます。

今回のような企画は少しニッチで旅前が重要となるので、営業力が必要です。そのため、一度に大量送客とはいきませんが、少しずつ継続的に実施することは可能です。継続的な来訪があることで、地域の人が「自分たちの地域って外の人には魅力があるんだ」という気づきとなり、地域への自信と誇りを持ってもらえればうれしいです。

本企画は食にフォーカスを当てましたが、伝統産業や工芸品でも応用できます。地域の方との協力で観光業がまさに地域を見に行って、地域に光を当てることになります。地域の経済効果を上げるお手伝いができることが、この産業に従事する魅力でもあります。当社にはそのような思いの社員がいるため、この企画が実現しました。

能登半島地震発生から約3年

能登はまだまだ復旧中、観光を復興の力に

一般社団法人能登半島広域観光協会
専務理事　中谷 武史氏

2024年1月1日。最大震度7の能登半島地震が発生しました。私は、当時住んでいた名古屋から1人暮らしをしている母に年始のあいさつにと輪島市に帰省していました。地震発生時、自宅から数キロ離れた親戚宅にいました。自宅に戻る道すがら、倒壊し道をふさぐ多くの家屋、隆起したマンホール、液状化した歩道などに呆然としました。そして、夜になって燃え広がった輪島本町朝市地区。3日後、燃えつくされた街を見て、言葉を失いました。

契約していた二つの会社のスマホは自宅では電波届かず。電気は1月8日まで回復せず。水道が使えたのは3月でした。地震の後、名古屋から毎月輪島に帰省し、能登の復旧の様子を見てきました。

農業・漁業・林業といった第一次産業が中心の能登の復旧・復興には、観光業の再建が必要との思いを持ち続ける中、能登の知人より現職の誘いを受け、2026年5月に能登へUターンしました。

能登半島地震発生から約3年。現地はようやく復旧が進み、幹線道路の再舗装が行われ、ドライブも快適になりました。7月7日には、のと里山空港が「のと里山ポケモン・ウイズ・ユー空港」となり、ポケモン目当ての観光客が爆増しています。生活環境は復旧しつつありますが、観光客の受け入れ環境はまだまだです。

和倉温泉では、観光客の受け入れ可能な旅館の再開が続いています。奥能登も輪島市のルートイン輪島本館が営業再開し、少しずつ受け入れ環境が改善しています。とはいえ、奥能登ではバス1台のお客さまを受入れできる昼食箇所が数か所しかなく、観光ルートが制限されることもあります。しかし、個人・小グループの旅行は問題ありません。ぜひ、今しか見られない能登の復旧の様子を見ていただければと考えます。

地震で多くの家屋が倒壊し、現在でも多くの方々が仮設住宅での生活です。自宅を再建しようと思っても、建設・建築に携わる人がおらず、他の地域から呼び寄せようと思っても、奥能登には宿泊するところが不足しており、工事費が高騰しています。

まだまだ、奥能登は、復興とはいえない状況ですが、千里浜ドライブウェイのある口能登はすでに多くのお客さまでにぎわっています。能登半島広域観光協会としては、現在の能登の状況をより多く情報発信できるよう動いています。能登の復旧・復興に対して、観光業への期待は大きいです。ぜひ、能登に来て地元の食材や今しか見られない風景をお楽しみください。お待ちしております。

別府・湯布院大温泉郷の取り組み

～The Onsen Capital of the World～

世界一の保養・大温泉郷を目指して

別府市　観光・産業部　観光課長
牧 宏爾氏

大分県、いや、日本を代表する温泉観光地、「別府」と「湯布院」。両地域は車で30分ほどの隣接地でありながら、県外の方には地名は知っていても位置関係などご存じない方が多いのではないでしょうか。

「別府」は別府八湯と呼ばれ、圧倒的な源泉数と湧出量を誇る大温泉街を形成し、多様な泉質、宿泊施設や観光施設等エンターテイメント性を強みとし、にぎわいと活気を提供する観光地です。

一方、「湯布院」は由布岳の麓に形成された温泉地で、金鱗湖や由布川峡谷など豊かな自然景観と田園風景が広がる閑静な温泉地として、落ち着いた雰囲気で魅了する自然と調和した温泉保養地です。

この別府と湯布院の歴史となってつながりには、「別府八湯」を国内外への誘客プロモーション、共同企画をはじめ、オーバーツーリズムや2次交通対策など、観光課題の解決に向けても動き出しました。

具体的には、まずは統一ロゴを製作し、大温泉郷としてプロモーション活動をはじめました。

また、両地域の周遊、滞在時間の延長を目的に温泉や観光名所を巡るスタンプラリー、旅マエの外国人観光客に向けたオンラインチャットによる旅相談、別府から湯布院への手荷物配送サービスなどに取り組んでいます。

さらに、10月から、地元バス会社がオープントップバスの別府―湯布院ルートの運行を始めるなど、民間企業とも一体となった動きが始まっています。

別府・湯布院が核となり、大分県内はもとより九州全体への波及効果を高めていくとともに、両地域が抱える観光課題についても、その解決に向けて連携して取り組んでまいります。

突然の雨で、旅を終わらせない

傘をシェアリング 使い捨て防ぎ ごみ抑制

株式会社 Nature Innovation Group
代表取締役　丸川 照司氏

旅先で、突然の雨に降られた経験は誰にでもあるだろう。駅を出た瞬間に空が暗くなり、コンビニに駆け込んでビニール傘を買う。その傘は帰りの電車で邪魔になり、宿の傘立てか駅のごみ箱に置き去りにされる。私はこの光景を、観光が抱える小さな、しかし確かな損失だと考えている。

私たちは傘のシェアリングサービス「アイカサ」を運営している。駅や商業施設に設置したスポットで傘を借り、別のスポットに返せる仕組みだ。もともと通勤や通学の利用を想定して始めたが、上野の美術館や博物館、渋谷の観光案内拠点、お台場を結ぶゆりかもめの各駅、成田空港からの玄関口となる京成上野駅など、観光需要の高い場所で幹線駅といった旅の起点と、こうした「歩いて楽しむ」観光地への展開に力を入れたい。

もうひとつ、忘れてはならない視点がある。使い捨てのビニール傘は、観光地のごみになり、処理の手間も地域に残る。景観を守り、持続可能な観光を掲げる地域にとって、傘を「買って捨てる」から「借りて返す」に変えることは、小さくとも目に見える取り組みになるはずだ。

課題もある。観光地の施設は第三セクターや行政が管理していることが多く、設置までに時間がかかる。自治体や観光協会、施設の皆さんとの対話から、導入は始まる。私たちだけでできることは限られている。だからこそ、雨の日に旅行者が困っている場所を、地域の皆さんと少しずつ減らしていけたらうれしい。宿泊、運輸、行政、それぞれの立場から一緒に考えられることがあると思う。

雨は防げない。だが、雨の日でも旅を楽しむことはできる。傘一本で良い旅の続きを守れる街を、観光に携わる皆さんと増やしていきたい。